はしがき

本書のタイトルにある駿河（するが）・遠江（とおとうみ）・伊豆（いず）（駿遠豆（すんえんず））の三ヵ国は、ちょうど現在の静岡県と重なる。いまでも、静岡を三つに分ける言い方をするが、中部・西部・東部となり、まさに、中部が旧駿河国で、西部が遠江国、東部が伊豆国に該当する。同じ一つの静岡県でありながら、微妙に東・中・西で気質が違ったりしている。

駿河・伊豆の東が相模で、現在の神奈川県である。遠江の西が三河で、現在の愛知県である。地理的には、東京と名古屋の中間にあたる。東海道新幹線および東名高速道路に代表されるように、東西交通の要衝であり、それは、本書のテーマとする戦国時代においても同じだった。ただ、室町時代でいえば、駿河までが幕府の管轄下にあり、伊豆は鎌倉府の管轄下にあって駿河・伊豆間が堺となっていた。そこで線が引かれていたことは注目しておいてよい。そのあたりの位置づけは本書でも触れたいと考えている。

同じ静岡県民でも、旧伊豆の人々は、東京に距離的に近いこともあり、東京の方を向いている。それに対し、旧遠江の人々は、どちらかといえば、名古屋・京都・大阪といった西の方を向いているという違いも指摘される。

私自身、生まれは静岡市だったが、幼稚園に上がる直前に東京に引っ越し、そのまま東京で育ったので、東京の大学に進学したが、静岡で育っていれば、関西の大学に進学したかもしれないなと考えている。歴史を専門としたいと考えていて、戦国史の舞台となった畿内に魅力を感じていたからである。

現在、静岡県は「東海四県」という括られ方をして、愛知・三重・岐阜と一緒になっているが、東部にお住まいの方は、むしろ「うちは関東だ」と思っているかもしれない。たしかに、戦国時代、駿河・遠江は戦国大名今川氏の支配下にあり、今川義元が三河を征圧し、尾張にまで進出しているので、愛知県との関わりがあり、「東海四県」

という括りに抵抗はないが、伊豆はやはり違っている。戦国時代の伊豆は戦国大名北条氏の支配下にあり、初代早雲の時代は本拠が伊豆の韮山城だったが、二代目の氏綱から五代氏直まで、本拠は相模の小田原城であった。俗に北条領国を「関八州」といっているように、伊豆は関東圏といってよい。そのあたりの歴史的経緯も本書で追いかけたいと思っている。

その戦国大名今川氏が衰退し、それに代わって武田信玄・徳川家康が駿河・遠江を舞台に台頭してくる。武田・徳川の戦いの歴史も詳しく掘り下げたいと考えている。そして、駿河・遠江・伊豆の歴史ということになると、何といっても徳川家康である。ただ本書では、単なる家康の伝記ではなく、駿河・遠江・伊豆三ヵ国の歴史とのからみで家康を追いかけているところに特徴がある。従来、八歳から十九歳までの家康を「駿府人質時代」といって、今川義元の人質だったというとらえ方をしてきたが、単なる人質ではなく、むしろ家康にとってはプラスになった時期であったことにも触れている。このことに限らず、従来の通説とは異なる新しい研究成果も随所で取り上げているところを読みとっていただければ幸いである。